

こうがけい
虹雅溪に置く露の（上巻）

文章見本

第一章 人質

木々に覆われた狭く険しい山道を長らく辿った後に、漸く目的の、神の里の風景が出現した。鬱蒼と生い茂る深山を突き抜けて、いきなり目の前が開ける。

「止まれ」

騎乗した集団の先頭にいたカンベエが合図をした。

「全体、進軍止め！」

後方へ次々と指令が伝えられていき、数百人からなる歩兵部隊は行軍を中止した。

「休ませておけ」というカンベエの命により、兵士達はその場で思い思いに休息を取り始めた。

カンベエは先頭集団の中でも極側近の数名を伴って、その場から数十メートル先の崖端へと近づいていった。直ぐ後ろには、親衛隊がその背後を守るように散開して付き従っていた。

「お館様、用心なされた方が……」

カンベエの側に付いた親衛隊長が声をかけた。

「心配するな、キクチヨ。この崖は険しく、途中に身を潜めるところはないはずだ」

馬に跨ったまま身を乗り出して、カンベエは切り立った崖を見下ろし、それから視線を前方に戻した。

「この景色を目にするために、はるばるここまで山道をやって来たのだ……」

崖の下には森に囲まれた閑かな里の佇まいが広が

っていた。一見すると、取り立てて見るべきものもない、何処にもある山里に見える。

しかし、ここは戦略の要所。内陸部から山間地帯を通って海へと抜ける、交通の要所なのだった。

しかも、この地方で広く信仰を集めている雷電神のご神体が鎮まる本殿が存するところでもあった。

雷電神は、上は各国の領主から下は平民に至るまで幅広い階層が帰依しており、諸国の国主や豪商によつて各地に末殿が寄進されるほど力のある神であった。

それ故、その本殿を護るように広がるこの山里、虹雅郷（こうがきょう）に領土的野心を持って手を出そうとする者はこれまではなかった。今、神那国（かんなこく）領主カンベエが動くまでは。

「明朝はいよいよ返答を聞くことが出来るな」
傍らの親衛隊長にカンベエが呟く。

「この広場は見晴らしが良い。早々に野営の準備にかからせろ」

「かしこまりました」

「虹雅郷の代表団を迎える準備も手抜かりのないようにな」

「は。心得ました」

隊長からの命が部隊に伝わると、それまで休息を取っていた兵達は俄に活気づき、そここで野営の準備が始められた。

領主に同道した重臣達も、互いに顔を見合わせ、いくらか声を潜めて言葉を交わし合う。

「さて如何、相成りますか」

「左様ですな。ここから見ただけでは、あの館の内
部でどの様な決定が行われているか……」

話す声に次第に緊張がにじむ。

「うむ。窺うことは出来ぬな。それにしても、何とも言えぬこの静けさよ。さすが、雷電神のおわす里だ」

カンベエは目を細めて深山の空気を味わい、最も奥まったところに見える虹雅郷主の館を見つめた。

(さて、マサムネ殿。どう出るかな)

虹雅郷に対してカンベエから突然の通告がもたらされたのは、僅か五日前のことだった。

「虹雅郷の統治を直ちに神那国に譲り渡すべし。その際、郷主一族がその血を捧げ、重臣等が移封蟄居することを受け入れるならば、平和裏に事は運ばれるであろう。もし抵抗あるならば、神那国の軍精鋭数千を以て直ちにこれを占拠せしむものである」というのが通告の骨子だった。

期日には、カンベエ自らが兵を率いて虹雅郷まで出向き、すぐさま譲渡に関する実務も執り行う旨、書き添えられていた。

回答の期限は五日後。通告の真偽や内容を精査するいとまも与えぬ、また、他国へ応援の要請や交渉の仲介を依頼するにも短すぎる猶予期間だった。

虹雅郷にも兵組織がないわけではない。が常の任

務は神殿や郷内の警備が主であり、そもそも他国との闘争を目的として置かれたものでもなかった。

有無を言わせぬ隣国の圧力に、小さい山里は為す術がなかった。郷主マサムネを中心に首脳部が集まり協議が行われたが、答えは決まったも同然だった。

「ここは、要求を容れざるを得まい。さもなくば、山野も畑も民人(たみびと)も、神那国の兵士に蹂躪されてしまうだろう」

マサムネは決断を下した。家臣達は、要求の重大さに押しつぶされて言葉を発することが出来なかった。

「この由緒ある、雷電神のおわす里を、ですか？」ただ一人、マサムネの傍らに座した青年のみが、怒りというよりは失望に近い不信任感を露わにして抗議の声を上げた。

「父上は結論を出すのが早すぎます。いくら神那国が強国とはいえ、このような不敬が許されるはずが

ありません。第一、噂に聞くカンベエ殿は、名君の誉れ高い方ですよ？理由もなくかような要求を突きつけてくるとは思えません。どこかにきつと交渉の余地があるはずですよ」

それに対し、郷主は息子を穏やかにたしなめた。

「その名君振りには、かような、容赦のなさも時として含まれておるのだ。シチロージよ」

「…この様な暴挙、他国が、特に八十八(やそは)国などが黙ってはおりませぬ」

「事前の周囲への目配り無しに、かような行動に出られると思うか？」

「……」

「巫女(かんなぎ)様には何らの障りはないと約束しておる。我ら一族が犠牲になれば済むことだ。家臣の一部を何処かへ移して、それを以てその他の郷内の全ては許されるという。例え交渉できても、これ以上に有利な条件は望めまい」

「私は、自分の命が惜しくて言っているのではあり

ません。突然の、あまりに理不尽な……」

「分かっておる。若いそなたには中々承服できるものではあるまい。しかし、これもまた政の現実というものだ。…それでは、僕はこれから巫女(かんなぎ)様の許に参って決定をご報告申し上げてくる。皆も良いな？」

シチロージは、膝の上で握った拳に力を入れた。色白の皮膚がたちまち青ざめる。

「愚挙に及ぶなよ、シチロージ。何事もなく会見の日を迎えねば、この神の里、間違いなく悲劇を迎えるからな」

ハツとして顔を上げた息子の空色の瞳には強い光が宿っていた。それを見て、マサムネは胸塞がる思いだった。虹雅郷の豊かな自然と里人の他にも、預かりものがあつたのだ。

(巫女(かんなぎ)様、どうかお許しを。これ以上護ることは叶わなくなりました…)

隣国が攻めて来るといふ話がどこからか広がっ

て、里は一時恐慌をきたした民人で混乱したが、郷主が神那国の要求の内容を説明し、全面的に受け容れることを表明してからは、一転して深い悲しみに包まれた。

遡ること遙かな昔からこの里を治めてきた郷主一族が数日後にはその血筋を絶たれ、それと引き替えに自分たちの安寧が得られるという恐ろしい成り行きに、誰もが打ちのめされたのだ。

その異様な静けさの中に、カンベエが手勢を率いてやって来たのだった。

要求が容れられないときは精鋭数千が制圧する、と言いついて渡り渡りしたが、交渉成就を見越して、実際には数百の兵しか連れて来ていなかった。敢えて神那国にたてつくほどマサムネは取り乱しはしないだろうと考へてのことだった。しかも内心では、交渉成就の暁には、郷主一族を悪いようにはしないつも

りだった。

例え抵抗を受けても、連れてきた数だけで十分だという自信もあった。もつともその時は、本当に郷主一族の命を奪わねばならなくなるが……

カンベエには、雷電神を畏れる気持ちは無かった。神ではなく、神を畏れる人々の行動にこそ注意を払わねばならないと考へていた。狂信的な人々、信仰を口実に動く人々。彼らの動向は時に予測が付かない。

それに比べれば、むしろ、もう一つの強国である八十八(やそは)の方が、権謀術数という物差しが使える分、読み易い。現に、この度のことでは、虹雅郷を手に入れる事による利益の幾分かを、八十八(やそは)の国主と分かち密約を交わしているのだ。

(虹雅郷主マサムネ公は理性の人だ。必ず神の里を守る決断をするであろう。儂とて、この美しい里を破壊するのは忍びないし、そうなればその後が続くであろう諸国との戦さは是非とも避けたいからな)

野営の天幕の上にも、夜闇が下りた。交代で立つ見張り以外は寝静まっていた。

親衛隊によつて堅く守られた領主の天幕の内側で、カンベエは一人だった。側仕えも下がらせ、いつものように物思いにふけっている。

ここ数年、夜が訪れても、素直に眠りにつくことが難しくなっていた。抱える問題はあまりに多く、背負った責任はあまりに重い——それ自体は先代の後を継いで神那国の領主になって以来変わらぬはずなのだが、何故、この数年が特に処し難いものを感じられるのだろうか。

ふと、留守を預けた執事の顔が浮かんだ。最近あやつは、僕に后を娶れとうるさく言いおる。さすれば、この憂鬱も失せるとな。

そういう類のものなのか？誰か側にいれば解決するものなのか？——これは政なのだ。

ふと背後に気配を感じて、カンベエは緊張した。天幕の周囲はキクチヨの配下が固めているはず。知らぬ間に内側へ入ってくるなど不可能だ。

「お客人はどなたかな？」

肩越しに、静かな口調で尋ねてみる。応答はない。が、確かにかすかな人の息遣いが感じ取れた。

振り向こうとしたとき、その気配が急速に近づいてきた。咄嗟に身を交わしてすれ違いざまその腕を掴んだ——つもりが空を切った。

強い光を宿した青い瞳のまぼろしが傍らを掠め、カンベエを一瞥して消えた。顔は確かでなく、金色の髪とおぼしき幾筋かが揺れるのが僅かに見えたのみ。

「何だ、今のは……山の神でも現れたか」

あの光には、強い敵意がこもっているとみえた。

否、殺気と言っても良いかも知れない。さても神が人間に殺意を抱くものだろうか。

「青い瞳がこちらを睨んでいた」

神を畏れぬカンベエだが、不思議を否定するわけではない。思いがけない深夜の体験が深く心に刻み込まれ、何故か心引かれる思いで、この殺気を抱いたまぼろしに再び会ってみたいと思つたのだつた。

夜が明け、会見の日がやってきた。

特に刻限の取り決めがあつたわけではないが、会見用の天幕で歓迎の準備が整つた頃、マサムネ一行が到着した。入り口に立ち、カンベエ自らそれを迎える。

「ようこそ、マサムネ殿。久しいですな」

「うむ……」

それ以上は答えない来客を、カンベエは穏やかな表情で迎え入れた。

「ご一同も中へ入れよ」

天幕を前にして遠慮がちに佇む虹雅郷の随行団にも入るよう促す。視線を先へと向けると見慣れない若

い顔があつた。

「……もしや、マサムネ殿のご子息か？」

「いかにも」と中から声が出て、一旦は奥へ入つた郷主が顔を見せた。

「シチロージでござる」

「これはこれは。よくぞ来られた！」

シチロージは視線をそらし、無表情で黙礼しただけで、歓迎の言葉をかけるカンベエの傍らを通り過ぎようとした。

が、一瞬だけ視線が絡んだ。その瞬間、カンベエは前夜のまぼろしの正体を見たと思つた。暗い陰を含んだ空色の瞳と金髪を結び上げた若者の姿に、カンベエは思わずその腕を掴んで引き寄せていた。

「今度こそ、この腕を取ることが出来たな」

耳元で囁く。

シチロージはとっさに腕を振りほどこうとしたが動きを止めて、答える代わりに何のことか見当もつかないという顔で眉をひそめた。

カンベエの思いがけない行動に、マサムネは息子の傍らに寄った。

「せがれが何か粗相でもしましたかな？」

「いや、何も。ご子息とは初対面の筈だが、つい最近会ったような気がしましてな」

マサムネがチラと息子を見る。シチロージは相変わらず眉根を寄せて、何の話かと言う表情をしていた。

「お手をお離し下さい」

ようやく言葉を発した。

「おお、これは失礼。では、シチロージ殿、改めて歓迎いたす」

笑みを浮かべて挨拶の言葉をかけたカンベエは、面白いことになりそうだと考えていた。

「何と言われる！せがれを人質に差し出せと？」

予定外の成り行きに、いつもは穏やかなマサムネが

語気を強めた。

「左様」

対するカンベエは静かに言葉を続ける。

「断固たるところを見せるために、御一族の血を求める一文を入れたまで。統治権委譲を承知して頂いたからには、この条項、実行に移すつもりはござらん」

「私は…」

怒りと戸惑いを露わにしてシチロージが抗議した。

「私は、いっそ、この命を投げ出す方を選びます」
声を震わせてカンベエを睨みつける。

ああ、この瞳だ、とカンベエは思った。昨夜儂の天幕を、確かにこの若者は訪れたのだ。怒りが色白の頬を染めて、何とも素晴らしい見ものではないか。

「予定通り、我が国から行政長官を派遣しても、無論我が国は一向に構わんのだが」

内心の高揚は隠して、カンベエは続けた。

「そうなれば、通告通りに御一族は廃される。それよりは、委任統治という形でマサムネ殿にこれまでどおりに治めて頂き、神の里も人々の暮らしも全て変わりない。如何かな？若君」

殊更相手の立場を強調する言葉を選んで、カンベエはシチロージに決断を迫った。

「但し、私が貴国に赴くこと」

「この場で死を選ぶより、他国で永らえる方を選ぶのが賢明だと思うが？」

シチロージは、交渉の主導権を持つ相手の顔をまじまじと見た。

こちらが何と言おうと好きなように決定できるはずのカンベエの目が、何故か、是非とも共に来いと訴えかけてくるように思えたのだ。

「…承知しました」

「おお、よくぞ決心された」

カンベエは満足げに頷いた。

一同に安堵の空気が広がった——マサムネの内心

の憂いを除いては。

一滴の血も流すことなく交渉がまとまったという知らせを携えて、使者が虹雅郷、神那国双方の留守役に宛てて送り出された後、午餐が祝宴として催された。囚われの身となることを引き受けたシチロージへの気遣いや遠慮はあったが、座は和やかでくつろいだものとなった。

やがて、シチロージを残して一同が引き上げる時が来た。随員のひとりひとりが別れの言葉をかけた後、父が息子と相対した。

「シチロージ…」

「ご心配なく、父上。大人しくしています。ただ、私が帰らないと知ったらオカラが泣くかと思うと…」

「おそろくな。儂が言い聞かせよう」

年の離れた妹の顔が浮かび、ひと言別れを言いたか

ったと、それだけが心残りだった。

カンベエは、人質がひとりで崖の上に立って同郷の者を見送るのを許した。

「全く見張りがいないのでは、ひよっとして逃げられるかも知れませんか？」

「後で一献、付きあってくると嬉しいが」

そう言っただきり、カンベエは自身の天幕に引っ込んでしまったのだ。

山里の夜は早い。暮れていく里の道を帰る一団の姿が見る間に小さくなり闇に溶け込んだ。

その跡に目をこらしながら、シチロージはカンベエの発した言葉のあれこれを反芻していた。

この度の企み全体を見れば、カンベエに対する反発と怒りは大きく言葉に尽くせないほどだ。しかし、と一方で思う。

（緊張をはらむ場であるにもかかわらず時折見せた表情は、一体何だったのか。隙があるからなのか？ いやまさか、大国である神那国の領主ともあろう人

物が我らに隙を見せるはずはない。だとしたら……わざとかな？この私に対して？）

思わず天幕を振り返る。中の人物が今どうしているのか、全く気配は感じられなかった。その静寂を埋めるかのようにどこか遠くで獣が細く長い声を上げた。

数日間の緊張を丸ごと飲み込んで、神の里の夜は深まっていった。